

徳田進編

本草物語

古典文庫

徳田進編

本草物語

古典文庫

古典文庫 四二七冊

禁複刻

昭和五十七年五月二十日印刷発行

非売品

編者 徳田 進

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

本草物語

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	三
本草物語 春	五
本草物語 夏	九
本草物語 秋	一七
本草物語 冬	一三
本草物語解説	德田進 三九

凡 例

一、本書は、九条家・桃園文庫夙藏の宮部万女自筆本『本草物語』全四巻を翻字したものである。

一、翻字に当つては、変体仮名は通行の仮名に、漢字と仮名遣は原文のままにした。

一、底本には虫喰のため判読できない部分があるが、その過所は静嘉堂文庫の下書き本に拠つて補い、括弧を施した。例えば「煙の□ち」を「煙の(う)ち」とした如くである。

一、底本には句読点と会話を示すカギ括弧が一切無いが、校者が私に句読点とカギ括弧を施した。

一、底本の、現行文法から見て異なる表現の部分には「ママ」を施した。

一、その他は一切底本に変更を加えなかった。

昭和五十六年十二月十九日

徳 田 進

木
草
物
語

春

さつきまつ花たちはなのひたりのおほひまうちきみとて、このころあめかしたまつりこち給へるは、時の帝の御母后玉つはきの女院の御はらからにて、當代の御をちにさへおはしませは、世にやんことなくもてあかめ奉る。御さえ御心さま御かたちはたすくれさせ給へれば、よろつうちあひ、めてたさいはんかたなし。北の方二所も給へりけるを、にしひんかしにいみしう御しつらひ二なくし給ひてかしつき聞え給へり。東のたいのうへと聞ゆるは、先帝のふちつほの女御にしのひてなと物し給はは、世のおと聞もいかにそやあるへきを、これは御門御心とゆるしきこえ給へるそかし。さるためしふるくもありけるにこそ、先帝の御代のすゑにまいり給ひていみしう御おほえあり。時めき給へりしままに后にもるさせ給ふへかりしを、御子もおはしまさす、まひ

てはか／＼しき御うしろみもおはさねは、おほしたゆたいたる程に雲
かくれさせ給へりしそ、いとあはれにくちおしき御すくせなりける。
御のうおもらせ給ひて、此おとと参り給へるに、御枕かみちかくめし
よせさせ給ふて、さま／＼の給はせつる事ともありけむ。その御つい
てに、そ、此女御の御ことは御心さしのあまりにおはしまさぬ世にたた
よはせしとの叡慮にやおはしけん、いとかしこき御おきてなりけり。
けにかからさるましかは、すこしたたよはしうおはしまさんとみえた
り。ちちおとと母北のかたなとうちすて世をはやうし給ひしかは、御
せうとに青柳の中納言とてたゞ一人そおはしける。されどあなつらは
しからすおととのもてかしつき聞え給ひて、あさからすおほしかはし
たるもしるく、此御はらにいみしう美しき姫君をさへいたきいて給へ

れは、今よりきさきかねといつきかしつき聞え給ふそ、いとゝめてたきや。にしのたいは桐の葉の大將の御女そかし。御はらからなといとあ(ま)たおはして、すへて顔ひろくさかへ給ふめり。此御は(ら)には菊君とて、いと二なくうつくしき玉のをのこそいてき給ひける。ことし十三はかりになりたまへり。またいときひはいはけたる御ほとなれと、御こころさまそいまよりおゝしうすみたるけそし給ひける。ことし御元服せさせ給はむとて、おとおほしいそき給ふ。九月はかりにとそおきて給へり。かくいふは五月のはしめつかたになむ。さみたれ例のとしよりもかきたれ、日かすふりて賤かかやなといふせく、のきはもくちなんころなれと、みつはよつはにみかけるとのゝうちは軒をめくる玉水のをとも中／＼おかしうも哀にもききなし給ふ。おととは御門

わかうおはしませは御まつりことしけくて、つと内(に)のみ(さ)むらひ給ふか、けふはすこし御いとまありて(東)の対にわたり給ひつつ、はしかくつれ／＼となかめさせ給へり。女君もみきてうのはつれはつかにさしいて給へる。御かたはらの御ぐしのこほれかゝらせたまへる御さま、あてに心くるしきまてたをやき給ふ、咲みたれたるふちの花といふへからむ。はたちに六つ七つはかりそあまらせ給ふ。今そ盛にねひとゝのほり給へり。しめ／＼とまめやかなる御物かたりなときこえかはし給ふほとに、ひめきみなたにわたりたまへり。いみしうしろうふくらかにて、あいきやうはこほるゝはかりみえさせ給ふ。御くしけさやかにいとめてたくて、きぬのすそ二三寸にたらせ給はぬ程なり。おとゝうちゑみてまもらせ給へは、はちらひてそはみたまへる、いとゝ

うつくしく見奉らせ給ふ。「こよなうもこそお(と)なひ給ひにけれ。きのふにけふはまさりてめつらしきさまし給へるそかし。いまはひいなあそひなどは(に)けなうこそおはせ。手習御琴などによく心いれ給へ」とをしへきこえさせ給ふ。五月雨はれんとにや、風うちふきて、おまへのたちはな霰しけうこほるるに、かほりあひたるおとゝの御袖の匂ひさへえならぬゆふはへなり。「盧橘みたれて山雨おもし」とほのかにうちすんし給うおりから、女院より御せうそこあり。さかのに御堂たて給はんとてかねての給ひあわせたるを、おなしうははやうなときこえ給ふ御ふみなりけり。はしにかくそありける。

はくくみし花たちはなの袖の香の残るかたえをなをたのむ哉

国母の御身にて、なにごとも御心にまかせたる代なれと、おとゝの御

おきてをそ大小のことにつけてたのみ聞え給ふ。さるは御心ふかふものつみをのみし給ひければ、此御ゆるしなくてさし過し給ふことそなかりける。おと、いみしう驚きかしこまり給ひて、「いとかたしけなうもの給はせ給へるかな。をこたるとはなけれど、おほやけわたくしいとまなくて、をのつから過しつるほとを、いかにおろかにもこそおほしけめ」とて、御かへしはかへす／＼かしこまり侍りてなん、

橘のみはそれなからはくくみしむかしにをよふそてのかそなき

ことさらにまいりてこそきこえさせうけ給はらむ、とそかひたまへる。ややくれか、る空の雲めつらしうはれて、ゆふつくよおほつかなからぬほとなるに、西のたいにわたり給ふ。さし入給ふま、に御しつらひはれ／＼しう、あたりか、やく斗にそおはす。女君いとはなやかなる

御こころさまにて、かとく(し)(う)(も)(の)このみをそせさせ給ふ。御かたちすこし大きや(か)に、(御)色あひそあなきよ(け)とみゆるまで匂ひ給へるさま、色(こ)きもみちの錦と見え給ふ。(若)君おまへに侍らひ給ひて、ふえをそおかしう吹すさひたまへり。おと、の(あ)ゆみ入給へは、ふきさしてうちかしこまり給へる、月かけに光あひたるたくひなうおかしき御かたちを、さま／＼にいとうつくしと見奉り給へり。「五月雨のいみしううく、いたうあそひなともすさましくおほひつるに、笛の音そ時をもわかすおかしけれ。いつのほとにかくはふきとり給ひつる」とてほめきこえたまへは、女君もうれしとおほす。「あやしうこのきみのかくも(ん)にのみこころいれて、あまりにひきこもりおはせは、うしろめたきこ、ちしてす、めきこえ侍るにな(ん)」との給ふ。こよなうし

つまりたまへるをこ、(ろ)(く)るしうおもほすなるへし。おと、うちわらひ給いて、「(夫)なにかはうしろめたからん。をのこは才さへあるこそいとめてたきことなれ。されとあまりにねちけかましうむもれたらむもいかにそやあるを、わかき(う)ちはほと／＼心をやりてあそひをもし給へかし。夏草のことしけきひま／＼にもふりかたき物ぞ」とて、とりてふきならし給ふに、又ひときはすみのほりていとおかしきに、女君の御せうと月草の中將とみにわたり給へり、思ひかけぬ程なるを、「めつらしうもこそ」ときこえたまへは、「たたいま内よりまかて侍るを、御ふえの音のす／＼しう聞え侍りしにえすきかたくてなん」との給ふ。やかて御琴ともめしいて、なつかしう遊び給へるに、夏の夜はとなく更て、雲まな(か)らに月も入ぬれば、おと、はこなたにとまり給